

《研究ノート》

it-narratives と人形ファンタジー

伊 達 桃 子

はじめに

人形ファンタジーは、人形やぬいぐるみが命を持つと仮定し、彼らの目で見えた物語を描くことで、人間社会のさまざまな様相を浮き上がらせる手法である。現代児童文学のサブジャンルであるこの手法は、動物寓話や昔話など、多くの源流を持っているが、そのひとつに it-narratives とされるものがある。本稿では、it-narratives の歴史を簡単に辿り、現代の人形ファンタジーにその要素がどのように引き継がれているかを考察する。

1. it-narratives の定義とその評価

it-narratives とは、18世紀後半にイギリスで流行した一群の小説を指すサブジャンルの名称である。これらの小説の特徴は、人間以外のもの、すなわち動物や無生物を主人公または語り手として、彼らが出会うさまざまな人間のエピソードを緩やかにつなぎ合わせた構成を持つことである。

it-narratives（モノ語り）という命名は、硬貨、衣服、針刺し、ペン、馬車などの無生物の語り手に注目したものだが、犬、猫、小鳥、シラミ、子馬など動物が語る作品も一定数存在し、特に時代が下るほど後者の割

合が増える。そこで、主人公が流通によって持ち主を替えるという特徴に注目し、novels of circulation（流通小説）という呼び方もされる¹。とはいえ、樹木や建物のように流通しない主人公を持つ作品もあるため、厳密な定義はなかなか難しい。

Liz Bellamy は、その難しさを踏まえて、次の2つの特徴をこのサブジャンルを定義づける決定的要因として挙げている。

The first is a narrator that, whether animal, vegetable, or manufactured object, lacks independent agency.

…This highlights the second definitive aspect of the genre, which is the transference of the narrator or protagonist between otherwise unconnected characters, or, in the case of narratives of static objects like buildings, the movement of unconnected characters within the precincts of the protagonist. [Bellamy, 121]

これらの特徴を持つ it-narratives は、Charles Gildon の *The Golden Spy* (1709) がその最初期の作品と言われているが、1750年代を境として爆発的に増え、Francis Coventry の *The History of Pompey the Little: or, the Life and Adventures of a Lap-Dog* (1751) や、Charles Johnstone の *Chrysal: or, the Adventures of a Guinea* (1760) のように、商業的成功を収めて何度も版を重ねた作品もある。

しかし、従来の文学批評は、これらの作品に低い評価しか与えてこなかった。同時代の書評家は、Helenus Scott の *The Adventures of a Rupee* (1782) を以下のように評している。

This mode of making up a book, and styling it the Adventures of a Cat, a

1 括弧内の日本語については内田（2012）の訳語を借用した。

Dog, a Monkey, a Hackney-Coach, a Louse, a Shilling, a Rupee, or — anything else, is grown so fashionable, that few months pass which do not bring one of them under our inspection. It is indeed a convenient method to writers of the inferior class, of emptying their commonplace books, and throwing together all the farrago of public transactions, private characters, old and new stories, every thing, in short, which they can pick up, to afford a little temporary amusement to an idle reader. [*The Critical Review*, 477-478]

it-narratives に対するこのような酷評は後代の批評家にも引き継がれ、流行がすたれた後は、ほとんど忘れられた存在と化していた。しかし、1990年代頃から、このサブジャンルに対して新たな光を当てようとする動きが起こり、Mark Blackwellらの研究者が論文や研究書を発表するかたわら、入手困難だった作品群を収めた全4巻の選集 *British It-Narratives, 1750-1830* (2012) が出版されるなど、一部で再評価の機運が高まっている。

2. it-narratives の目的とその変遷

18世紀の it-narratives の典型的な筋書きは、モノが売られ、交換され、紛失され、発見され、贈答されるなどしてさまざまな社会階層の人々の間を転々とし、その過程で人間の欲望や愚かさを目撃するというものである。モノたちはその ‘unobtrusive ubiquity’ [Festa, 311] によって、持ち主たちの秘密をやすやすと覗き見ることができる。作品中にはしばしば同時代の出来事や有名人の名前が織り込まれ、政治的、道徳的な風刺を目的としていた。主人公はたとえ動物であっても、命のないモノのように取引され、半永久的に流通し続ける貨幣を除いては、いずれ価値を失い消えていく運命にある。

しかし、1700年から1900年までの it-narratives を収集、分析した

Liz Bellamy は、興味深い変化を指摘している。18 世紀前半の数少ない it-narratives は、すべてが無生物を主人公にした物語だったが、19 世紀には無生物の物語の割合は 57% に下落する。一方、動物が主人公の物語は、18 世紀後半から現れ始め、19 世紀前半には 45% に上昇する（後半は 37% となる）。こうした量的な変化が、it-narratives の目的や読者層といった質的な変化を反映していると Bellamy は述べている。

The increasing popularity of animal narratives in the late eighteenth and early nineteenth centuries is associated with a more general change in the purpose and apprehended audience of circulation narratives as a whole. For much of the eighteenth century, up until around 1780, the circulation format was largely used in satirical works addressed to an adult audience. In the last twenty years of the eighteenth century, a number of works were produced that adapted the circulation structure to produce moral and didactic stories for children. [Bellamy, 131]

大人向けの風刺物語から、子ども向けの教訓物語へという it-narratives の変化は、動物を主人公とした物語だけに限られたものではない。Lynn Festa は、指ぬきやコマ、ピン、そしてもちろん人形といった無生物を主人公にした子ども向けの多くの物語が、読者を楽しませると同時に教育する目的で書かれたと主張している [Festa, 314]。教訓物語の主人公である動物や無生物は、持ち主の子どもたちの振る舞いに道徳的な判断を下し、彼らが良い子であれば愛を捧げ、悪い子からは早く解放されたいと願う。同時に、主人公たちが作られ、流通する過程そのものが子どもの教育過程を模しており、読者の教育とパラレルになっている。読者は物語を読むことで、動物に優しくし、モノを大切にすることを学び、持ち主としての権利と義務を身につけていくことが想定され

ている。

物語の結末にも、このような変化が影響を及ぼしている。18世紀の作品と異なり、主人公は消費されて消えていくだけではない。Festaは、ヴィクトリア時代の作品は ‘reunite objects with their most virtuous owner, or otherwise carry them into sentimental retirement’ [Festa, 324] と述べる。そこには、所有物と所有者の強い絆が存在する。

The value these virtuous owners attribute to their possessions is affective rather than economic: object and owner love one another for their virtues rather than their monetary worth. [Festa, 324]

これらの物語において、主人公は取り替え可能な消費財ではない。古びたり年老いたりして、金銭的な価値を失っても、持ち主にとってかけがえない存在であり続ける。また、主人公の方も、自分を可愛がり、正しく扱ってくれた持ち主に愛情を抱く。動物であればある意味当然に生まれるこの愛着関係が、モノとの間に形成される時、it-narrativesは現代のファンタジー児童文学にもっとも近づく。そして、そのような愛着関係を人間との間に築くモノとして、もっとも適しているのは、言うまでもなく人形である。

3. it-narratives における人形の役割：

Memoirs of a London Doll

Bellamy の作成した 18～19 世紀の it-narratives のリストにおいて、人形を主人公とした作品が初めて現れるのは、1816 年の Mary Mister による *The Adventures of a Doll* である。この作品は、非常に教訓臭の強いものであるが、その一方で ‘curious scenes of nightmare-provoking violence’ や、ウェールズ地方の観光案内的な部分も含んでおり、単な

る教訓物語の枠をはみ出す要素を持っていると指摘される [Blackwell, 277]。

その後、1900年までの間に、10点ほどの人形の物語が Bellamy のリストに散見されるが、とりわけ人気があり、20世紀まで版を重ねたのが Richard Hengist Horne の *Memoirs of a London Doll, written by herself* (1846) であった。三宅興子は、この作品を「人形ファンタジーとでも名づけるジャンルを成立させたもの」ととらえている [三宅, 49]。ここでは、この作品の分析を通して、it-narratives における主人公としての人形の役割と、他の無生物あるいは動物と比べての特徴を明らかにしたい。

この作品のあらすじは次のようになっている。語り手は手足の動く木の人形で、ロンドンの貧しいが腕の良い人形師によって作られる。労働者階級の少女 Ellen (1番目の持ち主) の手に渡った語り手は、Maria Poppet と名付けられ、可愛がられる。しかし、ある日貴族の娘 Flora (2番目の持ち主) の目にとまり、Ellen はやむなく Maria を譲り渡す。上流階級の暮らしの中で、Maria は Flora の不注意のせいで何度も危ない目に遭い、ついに火事に巻き込まれて放り出されてしまう。焼け焦げた Maria を拾った肖像画家が彼女を修理し、モデルの姪 Mary (3番目の持ち主) にプレゼントする。中流階級に属する Mary は Maria を連れて大英博物館に出かけるが、途中で人形劇見物の雑踏に巻き込まれ、Maria を落としてしまう。人形劇の人形と間違えられた Maria は、劇団から古着屋を経て、貧しいイタリア人の大道芸人兄妹のものになる。妹 Brigitta (4番目の持ち主) は、裕福な客の少女 Lydia (5番目の持ち主) に親切にもらった札に Maria を譲る。Lydia とともにクリスマスのパントマイム見物に出かけた Maria は、観客の中に今までの持ち主ほぼ全員の顔を発見する。しかし、舞台の興奮に我を忘れた Lydia が Maria を舞台にまたもや落とし、Maria は役者からパトロンの貴婦人に

贈られ、その娘（6番目の持ち主）のもとでようやく安息を得る。

主人公は、it-narrativesの典型的な特徴であるさまざまな社会階層間の移動を行う。また、権力や名声を持った人物に対する風刺の要素も見られる。Floraの父は大臣なのだが、EllenからMaria宛ての手紙が届き、Floraが返事に困っている時、代筆を買って出て何とも堅苦しい珍妙な手紙を書く。

I [Maria] also laughed to myself. What a polite, unfeeling, stupid reply to a kind, tender-hearted little girl like Ellen Plummy! Whatever knowledge the minister might have of grown-up men and women, and the world, and the affairs of state, it was certain he was not equal to enter into the mind of a doll who had a heart like mine. [Horne, 69]

特徴的なのは、ここでの批判が子どもの目線から行われていることである。主人公が人形であることで、大人の世界の権力や名声を無価値化し、笑い飛ばすことができる。

子どもに対しても、Mariaは批判のまなざしを向けることがある。とりわけ、上流階級のFloraは、労働者階級のEllenやBrigittaに比べて明らかに否定的に描かれている。注文したドレスが出来上がるのをいらいらと待っているFloraの様子を見て、Mariaはこう思う。

I often thought what a pity it was she had not learned to make dresses herself; her mind would then have been employed, and she would have been so much more comfortable. Oh, how different was the happy day I spent among the poor little milliners when Ellen Plummy and Nancy Bell sat under the tent made of a sheet, to make me a frock and trousers. How happy were they over the work, and how impatient and cross was Lady

Flora, who had no work to do. [Horne, 72-73]

ここには、労働を尊いものとし、怠惰をいましめる教育的な配慮が見取れる。その労働の内容が、少女が人形の服を作ることだというのが、主人公が人形である最大の意味であろう。すなわち、人形は少女に母性教育を施す道具とされるのである。Mariaの持ち主6人が全員少女であり、Mariaが疑いもなく彼女たちを「ママ」と呼ぶことが、それを裏付けている。

Maria自身も、少女をかたどった人形であり、多くの経験を経ることで、理想的な少女として教育されていく。彼女は人形店で本の読み聞かせを耳にしたことや、ケーキ屋での人間観察を‘my education’ [Horne, 28] と呼ぶ。また、Floraの交友範囲で多くの美しい人形と出会ったことは、彼女に次のような学びをもたらす。

Of course I had been very vain and conceited. What else could you expect of a doll? But now I certainly felt much less vain... However, as I had been already beloved by two mammas, I soon became contented, and felt no jealousy or envy of the prettiness or fineness of others; and I also believed that if I was amiable, and could become clever, I should never be without somebody to love me. [Horne, 52]

うぬぼれたり、他人をうらやんだりせず、‘amiable’に振る舞っていれば、かならず誰かに愛してもらえる。まさに、当時の大人が少女に施したかった教育ではないか。

もう1つ、主人公が人形であることの意味に、持ち主と個人的な関係を結べることがある。Mariaは最初につけられたその名前を、持ち主が替わっても最後まで保持し続ける。名前を刻んだ金のブレスレットを古

着屋に奪われた時でさえ、代わりの粗末なプレスレットをつけてもらうというやや不自然な展開で、彼女のアイデンティティは保たれるのである。無生物の主人公にも、針刺しのように少女教育に特化した役割を果たすものがあるが、人形は名前と個性を持つ分、人間とより深い関係を結ぶことができる。

it-narratives における主人公の中でも、人形は子ども、とりわけ少女との結びつきが強い。彼女たちは、持ち主の少女と疑似母娘関係を結ぶことや、みずから理想の少女像を体現することを通じて、いずれ妻となり母となるにふさわしい教育を読者に施す役割を担っているのである。

4. it-narratives の流れをくむ人形ファンタジー： *The Miraculous Journey of Edward Tulane*

ここまで、18世紀に発生した it-narratives が、変遷を経て人形ファンタジーの1つの萌芽となった流れを見てきた。その後も it-narratives の手法は人形ファンタジーの中で生き延び、20世紀になってもさまざまな作品を生み出している²。

今回はその中から、2006年にアメリカで発表された作品、Kate DiCamillo の *The Miraculous Journey of Edward Tulane* を取り上げて、前節の *Memoirs of a London Doll* と比較することで、現代の人形ファンタジーが it-narratives とどのように類似し、また相違しているか探してみたい。

同作のあらすじは以下の通りである。主人公 Edward Tulane は陶器でできたウサギの人形で、裕福な少女 Abilene (1番目の持ち主) に熱愛され、何不自由ない暮らしを送っていたが、彼自身は誰も愛してはいなかった。ある日、Abilene の一家は豪華客船でロンドンに行くことに

2 Rachel Field の *Hitty : Her First Hundred Years* (1929) や、Janet & Allan Ahlberg の *The Bear Nobody Wanted* (1992) などが挙げられる。

なり、船上で少年に悪さをされた Edward は、海に落ちてしまう。数ヶ月を海底で過ごした後、老漁師 Lawrence の網にかかった Edward は、彼と妻の Nellie (2 番目の持ち主) のものになる。彼らは Edward を女の子の子と思い、Susanna と名付けてドレスを着せる。貧しいが温かい老夫婦との暮らしは、Edward の心を変えていくが、娘が無断で彼を捨ててしまう。犬に拾われた Edward は、飼い主の流れ者 Bull (3 番目の持ち主) に Malone と名付けられ、彼らと一緒に旅をする。Bull と犬を愛するようになった Edward だが、ある日、無賃乗車をとがめられ、車掌に列車から投げ捨てられる。老女に拾われ、かかしにされた Edward を助け出した貧しい少年 Bryce は、重病を患う幼い妹 Sarah Ruth (4 番目の持ち主) に彼を与える。彼は Jangles という新たな名をもらい、兄妹のもとで愛に満ちた数ヶ月を過ごす。Sarah Ruth は病気が悪化して亡くなった。Bryce は Edward と大道芸をして食べていこうとするが、無情なコックが Edward の頭を叩きつけて割ってしまう。Bryce は人形修理師の Lucius (5 番目の持ち主) に Edward を修理してもらい代わりに、彼の所有権を譲り渡す。美しくよみがえった Edward は、Lucius の人形店に並べられる。しかし、心はぼろぼろに傷つき、もう誰も愛さないと誓っていた。そこに、100 年以上さまざまな持ち主の手に渡っている古い人形が現れ、希望を捨てないように諭す。心を開いた Edward の前に数年後あらわれた母子。それは、元の持ち主 Abilene とその娘 Maggie (6 番目の持ち主) だった。

it-narratives の定石通り、Edward はさまざまな社会階層の人々の間を移動する。上流階級の Abilene の家よりも、労働者階級の Nellie や、社会の底辺に暮らす Bull や Sarah Ruth のもとにいる方を心地良く感じる点は、Maria Poppet と共通する。また、題名にあるように 'miraculous' な経過を辿って、元の持ち主と再会する結末は、Festa が Victoria 時代の it-narratives の特徴としたものと同じである。

しかし、注目すべき相違点がいくつかある。まず、Edwardの持ち主になるのは少女ばかりでなく、年齢も性別もばらばらな人々である。Edwardが彼らを「ママ」と呼ぶこともなく、両者の関係は疑似親子関係に限定されない。Edward自身も女の子と間違われた時、“Wearing a dress won’ t hurt me” [DiCamillo, 68, 以下引用同書] と諦めるなど、固定したジェンダー観にとらわれない描写がある。

また、この物語の最大のテーマは、Edwardの心の成長であり、苦難の旅を通じてそれを手に入れる過程は、彼の教育と呼んでもいいかもしれない。しかし、その内容はMaria Poppetのものとは大きく異なっている。持ち主を観察し、彼らの振る舞いを評価することで、勤労の貴さや地位や名誉の空しさなど、道徳的な価値判断を身につけていくのがMariaの教育であった。しかし、Edwardの教育は、一にも二にも愛について学ぶことである。

旅の始まる前、Abileneの祖母Pellegrinaは、誰も愛さなかったために魔女にイボイノシシに変えられてしまった王女の話語り聞かせる。彼女は“how can a story end happily if there is no love?” [34] と問いかけ、Edwardの耳に“You disappoint me.” [35] とささやく。それは話の中で、魔女が王女に言った言葉だった。Edwardは旅の途中、しばしばPellegrinaの言葉を思い出す。しかし、愛を知ることは、別れのつらさを思い知ることもあった。Sarah Ruthを失った後、Edwardは心の中でPellegrinaに叫ぶ。

Look at me. You got your wish. I have learned how to love. And it’ s a terrible thing. I’ m broken. My heart is broken. Help me. [149]

Luciusの人形店で出会った古い人形は、心を閉ざした彼にこう語りかける。

“You disappoint me,” she said. “You disappoint me greatly. If you have no intention of loving or being loved, then the whole journey is pointless…”

[189]

旅の始まりと終わりで、2人の老女（人間と人形）の言葉が呼応する。旅を経た Edward には、その言葉を理解し受け入れる心が育っていた。Edward の教育とは、失う痛みも含めて愛することを学ぶことなのである。

もうひとつ、Edward が Maria と異なっているのは、持ち主ごとに違う名前（時には性別も）を与えられる点である。彼は時にそのことにうんざりするが、持ち主との絆ができてしまえば、気にしなくなる。古い人形は、“you become a different doll in each place” [188] と述べているが、Edward は知らず知らずにそのことを学び、Maria より柔軟に個々の持ち主と関係を結んでいる。

The Miraculous Journey of Edward Tulane は、18世紀から続く it-narratives の流れをくみながら、固定したジェンダーや道徳観にとらわれず、より個人的、精神的なテーマを追求していると言える。

おわりに

18世紀から19世紀にかけて隆盛した it-narratives は、時代に応じてその目的や読者層を変化させてきた。その流れは、現代の児童文学における人形ファンタジーにも受け継がれている。教訓臭は薄められ、道徳観やジェンダー観も時代に合わせて変化しているが、人形を主人公にすることによって、時代や場所、社会階層を越えたさまざまなエピソードを描くことができる面白さと、子どもの心に寄り添うことができる利点は今でも変わらない。

もちろん、今回比較した両作には、時代や国の違いだけでなく、主人

公の種族や性別など異なる点が多々あり、荒い比較にならざるを得なかった。これを立脚点のひとつとして、今後はより多くの作品の比較検討を通して、it-narratives と人形ファンタジーの関係を研究していきたい。

文献目録

- Bellamy, Liz. (2007) . 'It-Narrators and Circulation: Defining a Subgenre.' Blackwell, Mark, ed. *The Secret Life of Things: Animals, Objects, and It-Narratives in Eighteenth-Century England*, 117-146. Lewisburg: Bucknell UP.
- Blackwell, Mark ed. (2012) . *British It-Narratives 1750-1830*. London: Pickering & Chatto.
- DiCamillo, Kate. (2006) . *The Miraculous Journey of Edward Tulane*. Cambridge: Candlewick Press.
- Festa, Lynn. (2007) . 'The Moral Ends of Eighteenth- and Nineteenth-Century Object Narratives.' *The Secret Life of Things: Animals, Objects, and It-Narratives in Eighteenth-Century England* , 309-328.
- Horne, Richard Hengist. (1846) . *Memoirs of a London Doll, written by herself, edited by Mrs. Fairstar*. New York: Brentano, 1893.
- The Critical Review: or, Annals of Literature* . (1781) . vol. 52, 477-478.
- 三宅興子 (1996) . 『『あるロンドン人形の思い出の記』論：人形ファンタジーの起源を求めて』 . 梅花児童文学第4号 , 48-67.
- 内田勝 (2012) . 「モノが語る冒険：『黒外套の冒険』 とその他の it-narratives」 . 岐阜大学地域科学部研究報告 vol. 30, 15-36.

